

学生寮のオジサン・オバサン

「何だいね、この人は、パチンコばっか行ってさ、いつも負けて帰るんだから。どうしようもナイネ！」

「何言ってやんでえ、おいらも遊びの一つや二つ構わねえダンベ！」
こんな具合に挨拶代わりの口喧嘩をよくするご夫婦が、私の学生時代をお世話して下さった学生寮のオジサン、オバサンであつた。

このご夫婦、お人柄に関しては天下一品である。私が入寮したばかりの時、金の無いのを見かねて家庭教師のアルバイトを探してくれたのがオジサンであれば、学祭に寮生全員で参加した長崎の蛇踊りの胴体を作る時、三日三晩ミシンを踏み続けたあと、ちやうど一週間、寝込んでしまったのもオバサンである。

群馬県はカカア天下で知られるが、このご夫婦も典型的な群馬式カカア天下であつた。もつともオバサンの方が体も二倍くらい大きかったので実力で喧嘩すれば絶対オジサンに分が無い事も、はつきりしていた。

因みにカカア天下の謂れは、昔、上州の男共が「オレのカカアは天下一のいいカカアさ」と自慢したものが始まりとされ、決して奥さんに頭が上らない旦那様の事ではないとのことである。

しかし件のオジサンは両方の意味でもカカア天下であつたように思われた。

オジサンとオバサンには二人の子供がいたが、上の子は女の子で、彼女が高校に上がる時、民間会社の社員寮の管理者として家族全員引越してしまった。今ではその会社を目出度く定年退職し、お孫さんの顔を見ながら幸せな生活を送られている由、その後の年賀状で知ったものだが、血の気の多い大学生百八人を抱える学生寮であつたため、かわいい娘に万が一の事があつてはと職場を変えたのではなからうか。

どの寮生にも親切で、また寮生からも親のように慕われていたご夫婦であつたが、私には特によくして下さつた。

味噌汁の上澄みの好きな私ために、「持山さあん、上澄みどけてあるよ、ホラ。」と時々他の寮生に分からないように気を使いながらお椀を渡してくれるオバサンの目は母親以上に母親らしかったのを覚えている。

ともあれオジサン、オバサンには人間性というものが溢れ出ていた。特にオバサンは何ものをも包み込む愛情に満ちていた。豊満な体つきだけでなく、肝っ玉も太くすべてを縁の下で取り仕切る迫力すら感じさせる人であつた。家計は決して楽ではなかつた様子だったが暗さはなかつた。そんな中に私は群馬女性の魅力を発見した思ひもした。

この人こそ群馬のカカア天下に相応しい人だと思った。また将来の私のヨメサンにも、こんな人を迎えて明るい人生を送りたいとも思った。

「もし良かったら持山さんにうちの娘、貰ってくんないかねえ。」と真面目な顔してオジサンに言われた時もあったが、これはお世辞が半分以上だと思っている。

そうこうしながらも卒業前に知り合った女性が現在の私の奥様であることから考えると、よくよく群馬女性との縁が深かったのではなからうか。

結婚して二十五年以上経った今、うちのヨメさんも自分が群馬県出身であることを完全に忘れていようであるが、私は彼女の中の群馬気質に今なお惚れている。

学生であった感受性の高い時代に寮のオジサン、オバサンが、夫婦とはこんなものだと身をもって教えてくれたお陰であると感じている次第である。カカア天下バンザイ！